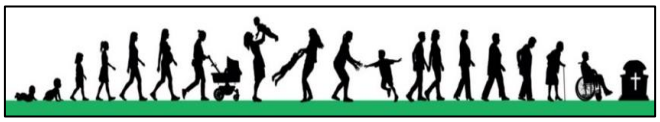

神戸国際大学　　2024年7月2日
キリスト教センター通信　第114号

「神を畏れる」

キリスト教センター　ミカエル　加藤俊彦

すべての人には命があり、その命はお金を払って買ったものでも、一所懸命働いて獲得したものでもありません。親は子供をお腹の中に宿した時、「子供を授かった。命を授かった」と表現するように、命は神様から頂いたもの、与えられたものです。自分の命の誕生に、自分は一切何も関わってはいません。命を自分がどうこうして得たものであれば、当然の所得とも言えますが、自分は何もしていないのに与えられたのですから、命があるのもそれをもってこの世で生きていけるのも当然のことではなく、恵みであり感謝すべきことです。この事実をわたしたちは、まず認める必要があると思います。

次に、母親がお腹の中から自分を出産する際、力んでくれたことによって生れることができました。看護師さんやお医者さんが、自分を取り出してくれたことにより、ベッドへと移ることができました。介護福祉の世界にADL（Activities of Daily Living・日常生活動作）という言葉があります。その意味は、日常生活を送るために最低限必要な日常的な動作のことです。つまり、寝起き、移動、食事、着替え、排泄、入浴といった動作のことです。

人が生まれたばかりの時、これらのことはすべて自分では出来ませんでした。赤ちゃんの時、自分で起き上がることも歩くことも出来ず、親に抱きかかえられて寝起きしたり、移動したりすることが出来ました。自分で食事することも出来ず、授乳してもらって身体が大きくなり、着替えることもできず服を着せてもらって寒さをしのぐことができました。自分で排泄の処理ができず、おむつを替えてもらって快適に暮らすことができ、入浴することもできずお風呂に入れてもらって、身体を清潔に保つことが出来ました。そもそも、自分では何もすること出来ず、親や周りの人たちに助けられ支えられながら、生きることが出来ました。しかし、それが次第に成長するとともに、自分で色々なことが出来るようになると、何も出来なかったかつての自分を忘れ、周りの人たちに助けられ支えられて生きていたことをも忘れるようになってしまいます。まるで、自分一人で生きていけるかのような錯覚に陥り、ましてや陥っていることすら気づけずに傲慢な人生を送ることになります。そして、人生の終焉に至って、物忘れが多くなり、目がかすむようになり、体のあちこちが痛くなり、周りの人のお世話になるようになり、「ありがとう」と素直に言えるようになって、ようやく本来の姿に気づくことになります。

本学の建学の精神にある「神を畏れる」とは、神様の前で自分が何者であるかを認め、平伏すことです。すなわち、自分に命が与えられ、生きることができるのは、恵みであり感謝であり、人は誰しも何歳であろうと、どのような立場にあろうと一人では何もできず、周りの人に助けられ支えられて、初めて生きることが出来るという、本来の自分の姿に気づくことです。そのような神の前での謙遜、謙虚な姿がものごとを正しく判断する基準になるということだと思います。

ひとくちメモ　建学の精神「神を畏れ、人を恐れず、人に仕えよ」

「神を畏れ」とは、神は恐怖の対象ではなく畏れ尊ぶべきことを示しており、真理・真実に対する謙虚さを表わしている。「人を恐れず」は、人間は神によって平等につくられた存在だから、誰も恐れたり諂ったりせず対等に接することが大切で、権力者に対しても恐れず立ち向う心を指している。「人に仕えよ」とは、利己心でなく相手のための“愛”を動機として行えという意味である。

『新約聖書』の「ルカによる福音書」によると、主イエス・キリストは「あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようになりなさい。また、上に立つ人は、仕える者のようでありなさい」（『新約聖書』「ルカによる福音書」第22章26節）とあり、隣人への愛に生きる人間となるよう求めている。